

分かれ合い 再び脚光

「生協運動の父」賀川豊彦 活動100年

キリスト教の精神に基づいた社会運動家で、日本の生活協同組合(生協)運動の父とされる賀川豊彦(1888～1960)の写真を、賀川豊彦記念松沢資料館提供。IIが、民衆を支える活動に身を投じ、今年で100年の節目になる。足跡を顧みる催しが開かれ、著作も相次ぎ復刊されている。格差社会の深い影にさいなまれ始めた今、賀川が唱えた「共生」への思いが、ほのかな輝きを放っている。(木元健二)



かがわ・とよひこ 1888年、神戸市生まれ。明治学院などで神学を学んだ後、生協のほか、各種共済事業、平和運動など「友愛」の精神に基づく活動を芽吹かせた。関東大震災(1923年)の救援活動に乗り出したのを機に東京に活動拠点を移した。55年にはノーベル平和賞候補にもなった。1960年に死去。

賀川が活動を始めて100周年の記念シンポジウムが今年7月、活動ゆかりの地・神戸で開かれた。

賀川の孫でグラフィックデザイナーの督明さん(56)も参加して「賀川の活動を振り返って、未来に継承すべきキーワード。それは「分かれ合う」という意味での『シエラ』と述べた。そんな「シエラ」の精神は阪神大震災に遭った神戸だからこそ発揮される、という願いを込めた。

賀川は、15歳で洗礼を受けたクリスチャン。病弱な少年で、結核を患い、いつ死ぬか分からない、という中で信仰と出会い、人を尊ぶ心を育んだ。米国の大学で神学を学んだ経



賀川豊彦を振り返り、孫の督明さん(右)らが語り合ったシンポジウム＝神戸市中央区、伊藤菜々子撮影

験もある。1909年、21歳で神戸の貧しい人々の街に住み込んだのも、信仰の基盤があったからだ。賀川の活動で忘れられないのが、「一人は万人のために 万人は一人のために」の標語を掲げる生協の活動だ。原点は神戸市で活動していた1920年。灘購買組合と神戸購買組合の設立の指導である。消費者が少しずつ負担をしあって商品を仕入れる仕組みをつくれれば、暮らしは安定する。この考えに支えられ、今も生協の活動は活況だ。兵庫県内は「コープこうべ」をはじめ60%の世帯が生協の会員になり、全国では会員2500万人を抱える「日本生活協同組合連合会」(東京・渋谷)にひろがった。

記念イベント・著作復刊相次ぐ

20年に発売され、上中下巻で計400万部売れたとされる。ただ、長らく読まれなくなっていた。それが今年4月、PHP研究所によって上巻が復刊された。

賀川がスラム街で活動を続けていたころは、第1次世界大戦の戦時成り金が出現する一方で、貧困層の不満が募り、格差社会といわれる現代とも重なる。小林多喜二の「蟹工船」が注目されたのも、「死線を越えて」の復刊に弾みがついた。

6月に出版された「友愛の政治経済学」(コープ出版)は、1930年代に賀川が米国で行った講演の邦訳。ロシア革命後の旧ソ連を「最も不満足な強制協同組合国家」と批判し、返す刀で「利己的な自由を持つだけでは幸福とはいえない」と資本主義の限界にも言及した。そのどちらでもない「第三の道」を、友愛という言葉で表した。

反公害や反官僚主義を掲げた「友愛」や「共生」の心が染みていく。明日を見つらい世の中に、「友愛」や「共生」の心が染みていく。

賀川豊彦ゆかりのイベント

- ◆9月6日 神戸市東灘区のコープこうべ生活文化センター。「友愛の政治経済学」の出版記念講演会。
- ◆10月10日 徳島市のあわぎんホール。講演会やシンポジウムなど。
- ◆10月18日 鹿児島市の県民交流センター。映画版「死線を越えて」の上映会。
- ◆11月28日 東京都千代田区の東商ホール。生協や全労済などによる講演会。
- ◆12月22日 神戸市中央区のポートピアホール。日野原重明さんら3人による語り合い。